

父の遺稿について

父・五百旗頭真は2024（令和6）年3月6日、ひょうご震災記念21世紀研究機構にて執務中に大動脈解離で倒れた。痛みと苦しさを訴えた後、「どうしたんだらう」と言ったそうだ。それが最後の言葉となった。一報を受けた家族は驚きと悲しみに打ちのめされた。

「どうしたんだらう」がさらに私の気持ちを暗くした。体の異変にとまどったこの言葉が、悪化する世界情勢へのとまどいをも暗示するかのようだったからだ。楽天的で前向きな父が、最後はとまどいに圧倒されたのか。何か言い遺してくれなかったのか。父の臨終に立ち会えなかったことで、学者の最後の思考を聞き逃した。

遺品整理は、遺稿探しでもあった。倒れた時に持ち歩いてきた鞆から、A4サイズ横書きのレポート用紙4枚の原稿が見つかった。

その直後に、国分良成先生からお電話を頂いた。そこで、父が日本防衛学会猪木正道賞基金の年報『平和と安全保障』第10号の巻頭言を執筆する約束をしていたと教わった。亡くなる3日前に基金の永澤勲雄事務局長は父から電話をもらっており、完成稿を郵送すると聞かされていたとも。家族が見つけた遺稿には、「戦う自由主義者・猪木正道」という題名があった。

きっとこれがその原稿だ。国分先生を経て基金に送り、予定通り掲載してただけた（2024年3月31日発行）。

今や学者のほとんどはパソコンで執筆するが、父は最後まで手書きで通した。それは関係者に少なからぬ不便を与えたが、今となっては、手書きの原稿とはこういうものであるか、という興味になるかもしれない。

そこでこの冊子で、遺稿とそれを読み取ったものを披露することにした。見開きの左側に手書きの遺稿を掲載し、右側にはそれに対応する活字を掲載する。読み取りの文字データは基金が快く提供して下さった。

なお、手書き原稿と同じレポート用紙の綴りから、執筆構想と思われる手書

きメモ「戦う自由主義者 猪木正道」が見つかった。遺稿の場合と同じように、見開きの左側に手書きのメモ、右側に私の読み取りを掲載する。

父と懇意だった有斐閣の元編集者・青海泰司氏によれば、父は短い文章であっても書きたい内容を一通りメモに記し、紙幅と執筆期間（約束よりも長くなってしまふことが多かったが）に応じて取捨し、対象読者を念頭に原稿を書き進めたという。

メモから想像するに、父は戦後の講和問題や平和主義、マルクス・レーニン主義についてもっと書きたいことがあったらしい。しかし遺稿では圧縮された。またの機会があると思ったのか、もう時間がないと無意識に悟ったのか、それは分からない。

そもそも父が素材とした猪木『私の二十世紀——猪木正道回顧録』（世界思想社、2000年）には、猪木が社会民主主義者であったことや丸山眞男を尊敬していたことが書かれている。だが父は反骨精神や合理主義を、猪木のより基底的な特徴として見出したようである。

結果として遺稿は、朝寝坊しがちな学生だった、父の青春の一コマとなった。知識人・猪木正道の人格についての、簡明なデッサンとなった。それを通じて、急逝間際の父が抱いていた知識人像をうかがわせる文章となった。

「戦う自由主義者」猪木正道は、信念を持ち、率直で、厳しい人だった。家族の知る五百旗頭真は、信念を持ち、率直で、朗らかな人だった。朗らかに戦え、と父が言い遺してくれたような気がしている。

生前の父へのご厚誼に対して、家族からの感謝を表したく、この冊子を編んだ。父と仲良くおつきあい下さり、ありがとうございます。

五百旗頭 薫

[追記] この文章の校了間際に、父の書斎にあったレポート用紙から書きかけのメモが見つかった。

ウクライナ危機——WWII 後最大の危機

しかし、まだ世界秩序崩落 or 復元力 未だ決らずと記されていた。